

ある青年期自閉症スペクトラム障害者における他者と対象への行動変化

加藤 弘美

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

本稿は、自閉症スペクトラム障害（以下、ASDとする）のある青年の他者と対象への行動の変化について、自己鏡映像認知の成立に影響する認知発達の一側面に焦点を当てて検討した。その方法として、特別支援学校高等部生徒Pさんの母へのインタビュー調査と新版K式発達検査の結果の整理を行った。それらの記録より、Pさんの他者と対象へ向かう行動の変化が生じた時期と同じくして、新版K式発達検査の認知・適応領域の発達年齢が1歳10カ月に達していたこと。それは、自己鏡映像認知研究において報告されているマークテストの過半通過年齢と一致していることに注目した。このことから、Pさんの行動における変化の背景に象徴化の能力が関係していると考えられ、青年期における行動としての変化を理解する新たな視点を提案できたといえる。

キーワード：事例研究、自閉症スペクトラム障害、青年期、自己鏡映像認知、認知発達

1. 問題

本稿は、自閉症スペクトラム障害（以下、ASDとする）のある青年の他者と対象への行動の変化について、自己鏡映像認知の成立に影響する認知発達に焦点を当てて検討するものである。筆者は、以前ASD児の自己鏡映像認知の発達について報告を行い（加藤，2017）、その成立に影響する認知的な要因を検討した。その研究報告では、ASD児の自己鏡映像認知の発達に影響する特性について、特に、乳幼児期早期からの姿勢や運動機能の特異性に注目して検討を行った。

本稿では、これまで直接的には取り上げられてこなかった自己鏡映像認知成立に影響する認知発達の一側面（象徴機能の獲得）に焦点を当てて考える。それをテーマとするに至った契機は、ASDのあるPさんに見られた他者や対象に対する行動の変化であった。Pさんは、現在特別支援学校高等部に在籍しており、主たる養育者である母は筆者が報告した研究（加藤，2017；2019；加藤・松本，2018）の協力者である。そして研究終了後も、養育者から彼の育ちの過程での様々な変化を聞いたり、微力ながらも発達の視点から助言を行ったりしてきた。そのような関わりの中で、高等部入学直後からのPさんの行動的な変化について聞く機会があった。Pさんは、これまでも進学・進級などの環境的な変化に対して、その成長とともに感覚過敏が顕在化するなど日常の行動において自身の内部に生じた変化を表してきた。このたびの変化については、それまで母が感じたことのない他者志向的な行動が偶然以上に見られたということであった。そこで発達の視点も含め

て詳細に話を聞く過程で、直近の新版K式発達検査の結果についても情報提供があった。筆者は、その結果を見た瞬間にPさんの「認知・適応領域」の発達年齢に引き付けられたのである。なぜならそれは、筆者が臨床的にも注目し問い続けてきた、自己鏡映像認知の発達に関わる以下の問題と結びついたからである。

ASD児の自己鏡映像認知の発達をテーマにした研究報告では、ASD児は定型発達（以下、TDとする）児と比較して、マークテスト（子どもの額周辺にマークを付けて鏡を見せ、そのマークが拭えるかどうかを見るテスト）の通過時期が遅れるものの、視覚的な自己鏡映像認知は成立すること。ただし、マークの付けられた自己鏡映像を見た時に、恥じらいなどの情緒的な反応が見られないなど、TD児とは異なる傾向があるという事実が示されている（別府，2001；赤木，2003；榎木田・菊池，2010）。さらに、これと合わせて筆者の関心を強く惹きつけ、未だ解決することのできない課題へと結びつく以下の事実が報告されている。それは、別府（2001）の示したマークテスト通過の可否と新版K式発達検査との関係であった。それによればマークテスト通過児の多くは、新版K式発達検査の認知・適応領域において発達年齢1歳10カ月以上であったという。この1歳10カ月という境界は何を意味しているのだろうか。筆者は、臨床現場にて多くのASD児を対象に新版K式発達検査を実施してきた。実際の子どもたちの反応を数えきれないほど目にしてきたからこそ、この事実を見過ごすことができなかつたともいえる。マークテストの通過と認知・発達領域における発達年齢1歳10カ月の力との間を結びつけるものは何であろうか。この時期に自己鏡映像認知成立に影響するどのような力が生まれるのか。この問題を改めて考えたいと思った。

本稿では、特別支援学校高等部在籍のPさんの事例を通して自己鏡映像認知の成立に影響する認知発達、特に1歳10カ月の発達に焦点を当てて考える。それによって、障害のありようが重度である青年期における支援に結びつく研究課題を明らかにしていきたい。

なお、協力者であるPさんの母は、加藤（2017；2019）・加藤・松本（2018）にご協力をいただいた方である。本稿の発表については、口頭にて承諾を得ている。この研究の利益相反はない。

2. 目的と方法

(1) 目的

本稿の目的は、ASDのあるPさんの事例を通して、他者や対象に対する行動変化の背景にある認知的な発達について考えることである。その手がかりとして、自己鏡映像認知成立に必要なとされる認知的な能力、特に新版K式発達検査の認知・適応領域の発達との関係に焦点を当てて考察する。これは、青年期における発達支援に結びつく研究課題を明らかにするだけでなく、青年期にみられる行動としての変化を理解する視点の提案にもつながるであろう。

今回、Pさんについて報告するに至った経緯は、以下の通りである。協力者であるPさんの母は、日々Pさんの声に耳を傾けてきた。母は、Pさんの変化に直面するたび、その変化が自身にとってもPさんにとっても望ましいことだと感じながら、Pさんの中で何が起きているのか。また、何がプラスに作用したのかがわからず、知りたいと思ってきたという。今回、これまであまり注目されてこなかった認知発達に焦点を当てたことにより、Pさんの行動変化を解釈するための新たな視点を提案できるのではないかと考えた。そこで、報告書としてまとめることを申し出たところ快諾を得た。

(2) 方法

協力者：Q県O市の特別支援学校高等部生徒Pさんの主たる養育者である母。

あらかじめ、口頭にてインタビューの目的を説明して研究協力への承諾を得た。その後、協力者の自宅を訪問しインタビューを実施した。インタビューは半構造化面接とし1時間15分程度話をしてもらった。なお、発話内容は協力者の承諾を得たうえで録音した。その内容は、逐語的にプロトコルに起こした。なお、このインタビューに先立ち、母よりPさんの幼児期からのサポートブック（コピー）と、新版K式発達検査の結果（コピー）をご提供いただいた。

3. Pさんの経過：インタビュー調査と新版K式発達検査の結果の記録より

以下、Pさんの幼児期から高等部入学以前までの様子を簡潔に記す。これを記載する理由は、今回Pさんの他者や対象に対する行動の変化と認知発達との関係を検討するにあたり、生育歴などの発達の背景を説明する必要があると考えたからである。

(1) 出生から診断・療育開始まで

生育歴については加藤（2017；2019）を参照し、以下に転記した。周産期は特に問題はなし。また、乳児期の運動発達、言語発達ともに気になることはなかったものの、眠りが浅く、よく泣くので抱いていることが多かったという。1歳6カ月健診での指摘事項は特になし。ただし、発する単語が少なく（1歳時点で3語程度「ワンワン」、「パパ」、「ブーブー」）ことばの発達はやや遅れていたものの、模倣もよくしていたので心配はなかったという。

2歳になる頃、それまで発していた単語が消失。表情変化が乏しくなり、視線が合いにくくなった。この頃から、ある特定のキャラクターの出るビデオを幾度も繰り返して1日中見ているようになったという。また、他者に対して（特に、養育者）肌を強くつまむ、噛みつくなどの他傷的な行動が目立つようになったという。

3歳児健診に該当する時期に保健センターから発達の遅れを指摘され、地域の療育機関へ通園することとなった。3歳後半、医療機関にて広汎性発達障害（本稿では、ASDと同義とする）との診断を受け、療育手帳を取得した。

その後、4歳児（年中）より保育園に入園。幼児期には、他児を「つねる」などの行動が目立ったこともあったという。そして、中学部入学後は自傷行為や不眠などの、情緒不安定な状況が続いたこともあり投薬など医療的な支援を受けることもあったという。

（2）特別支援学校高等部入学後の変化（インタビュー調査の記録）

以下、Pさんの高等部入学直後の他者や対象に対する行動の変化を記載する。これは、養育者のインタビュー記録を発話内容に忠実に整理したものである。また併せてPさんが、高等部入学後15歳2カ月（表中では、15：2と記載）のときに受けた新版K式発達検査の結果も表1・表2に示した。その理由は、母からこの検査を受けた頃と他者や対象に対する行動に変化が生じた時期がほぼ同じだったと報告されたからである。なお、エピソード報告にある下線部は、Pさんの他者や対象に対する行動の変化として筆者がもっとも注目した点である。

エピソード① 先生に向かう、先生を探す行動

「高等部になって男の先生になったんですけど、朝の7時くらいから行行って意志表示をするようになって。先生との相性が本当に良かったみたいです。余計なことは何も言わず、指示も適確に簡潔に出す。そういうのもあってPも落ち着いて、結局今は学校が好きっていうか、Pがこんなに人を好きになるなんて。その先生になってから、Pが走ってこうやって（両手を横でヒラヒラ）行くんだけど、それで、先生に抱きついていくのを見てもうビックリして。

毎朝Pが登校するときに、先生が階段から降りてきてくださるんです。6月のある日、いつものように登校すると、Pが階段をのぞくようにして見てるんです。先生が歩いてくるのを、こうやって覗いて見てるんです。そういう好きな人ができて、人そのものを見始めた気がする。」

エピソード② 見えなくなった対象を探す行動

「昔みたいに目に見えないものはないっていうのが、ごまかしがきかなくなってきて。目に見えなくても探すようになったの。Pの好きなDVDを、たくさんコピーしてるんです。ビデオを早送りでしか見ないから、今のデッキだと早送りができないんです。（省略）で、この大量のDVDをずっと持ち歩いてるもんだから、傷が付いてすぐダメになるんです。だから私がコピーしてストックしてあるんです。いっぱいコピーして隠してあるんです。それで、ある時、気づいたら、全部出してきて、くれていうんだけど、同じやつだし、すぐ傷にしちゃうからダメだって言って、いないうちに隠したんです。それをホント最近では、家探しのよう、あの探すようになって。それまでは、隠しちゃえばホントによかったんです。それをすごく探すようになって。」

エピソード③ 見えなくなった父を探す行動

「父親が入院して数日後、車があるのに父親がいないから、Pがそれまで使ったこと

のない父の写真カードを持ってきたんです。そこで、病院は大嫌いなんだけど、一か八か連れて行った。車の中で、パパがここにいるって言って写真を見せて、病室へ連れて行き、入り口から父を見せたんです。それで納得したのか、そっからはもう一切カードも持ってこなくなりました。」

エピソード④ 自己鏡映像への反応と写真の変化

「お風呂場にある鏡への反応に変化。今までは素通りしてたんですけど、いつもジーっと見るようになって、こうやって。あの鏡の存在を意識してるなどは思っているけどどうしてかはわからず。自分の写真も最近ですね、わかるっていうか、写真を携帯とかで、私が見てると、何？って感じで覗きにきて、Pちゃんだねとか言うと、指さしたり...で、こんなふうに兄弟と一緒に写真を撮れるようになったのも最近なの（カメラ目線で笑顔の写真）。修学旅行の写真も、こんなふうに笑った写真は初めてで、いろんな先生が写真を撮ってくれて。先生たちもこんなに笑ったのを初めて見たって。カメラに向かって笑うとかがなかったわけですよ。小さいときは、カメラを向けても全然撮れなくて、それがカメラって、写真を写すっていうのがわかって、カメラを見てくれるようになったのはホント最近です。」

エピソード⑤ 見えなくなった母への振り返り行動

「家族3人で車に乗っていたときのこと。父が運転をして、Pが助手席へ、母がPの後部座席に座っていた。いつもは、母が見えないと不機嫌になり大変なのだが、この日は、母が後ろから「ここにいるよ」と声をかけると、後ろを振り返り確認をする行動を繰り返した。このように後ろを振り返ったのは、この日が初めてだった。」

(3) 新版K式発達検査の結果の記録

以下に、養育者よりご提供いただいたPさんの2歳10カ月（表中では2：10と記載）からの新版K式発達検査の経過をまとめた（表1）。また、直近の検査での認知・適応領域の通過項目を表2に記載した。

表1では、最左に生活年齢、右に新版K式発達検査各領域と全領域の発達年齢を記載した。ここで筆者が注目をし、本稿での報告に結びつく契機となったのが、網掛けした部分

表1 Pさんの新版K式発達検査の結果

生活年齢	発 達 年 齢			
	姿勢・運動領域	認知・適応領域	言語・社会領域	全領域
2：10	3：1	1：5	0：11	1：6
3：7	1：8	1：6	0：11	1：6
4：7	3：1	1：9	1：0	1：9
5：5	3：1	1：9	0：11	1：8
6：4	3：1	1：8	1：1	1：8
8：5	3：1	1：9	0：11	1：8
10：4	3：1	1：9	0：11	1：8
15：2	3：1	1：10	0：11	1：9

である。生活年齢15歳2カ月の時点で認知・適応領域の発達年齢が1歳10カ月に達したことがわかる。

さらに、以下の表2で注目をしたいのは、Pさんが前回の検査で不通過であった項目【形の弁別I 3/5（網掛け表示）】である。

表2 Pさんの直近の新版K式発達検査における認知・適応領域の通過項目

	1：0超 ～1：3	1：3超 ～1：6	1：6超 ～1：9	1：9超 ～2：0	2：0超 ～2：3	2：3超 ～2：6
認知・ 適応	積木の塔2	積木の塔3	積木の塔5	積木の塔6	積木の塔8	
	丸板例前		角板例後	角板例前		
	瓶から出す		形の弁別1/5	形の弁別3/5		
		はめ板全例無				
		円板回転	はめ板回転全 1/4			折り紙I
	なぐり書き 例前					
	予期的追視	入れ子 3個			入れ子 5個	

4. 考察

筆者は以前、TD児を対象にしたマークテストの実験報告を整理し、その過半通過月齢が1歳10カ月であることを示した（加藤，2013）。これは、別府（2001）の研究報告にある「ASD児を対象にしたマークテスト通過児が新版K式発達検査の認知・適応領域の発達年齢が1歳10カ月以上に多く存在した」という事実と同様だといえる。そして、表1・表2には、Pさんの認知・適応領域の発達が、この境界年齢に達していることが示されている。この事実をもとに、Pさんの高等部入学直後の行動における変化の背景にある認知面での発達的变化について考える。

はじめに、表2にあるPさんの15歳2カ月時点の検査の通過項目のうち、「角板例前」「角板例後」「形の弁別I」の通過基準1/5と3/5の違いに注目をした。これらの項目に共通しているのは形を合わせることである。「角板」課題は、課題箱の形に合わせて穴に板を落とす。「形の弁別」では、○や△などの5つの異なる形が描かれた図版に、同型のカードをマッチングさせることが求められる。図版に描かれた型と手にしたカードとの間に同一性を見出すことで成功する。しかし、3/5に通過するためには、同一性を見出す力以外に、必要とされるものがある。

そのヒントは、村瀬（1981）が詳細に記した乳幼児期の発達にあった。彼は、そこでパズルBOXを例にあげて、幼児が型はめに成功することの意味を記述している。それによれば、幼児の型はめの成功には試行錯誤的な経験によりマルをマルとみなすことによるものと、それよりも高次の認知能力の獲得によるものがあるという。それは「マルがマル

であることに気づく」力。マルとシカクとの間に視覚上の区別をするだけでなく、それを（視覚的な違いを）「十分踏まえつつ、自身の内部に想定されたマルらしさ、シカクらしさの〈典型＝代表型〉を取りだす。マルとシカクの間にある「無限の中間形」から、マルらしさ、シカクらしさを決める、典型を抽出する（自己確定する）ことだという。マルやシカクの「パターン＝型」が内部に作り出されることによって抽出できるようになる。つまり、同じとみなすことの中には、繰り返しの試行錯誤によって気づく「〈類似〉〈同一〉」から、自身の内部に想定したマルのパターンを現実（目の前のパズルBOX）のマルに合わせる（構成同一）との区別があるのだという。これは知覚的に同一だとみなすだけでなく、マルの概念を当てはめたいうえでの成功だといいかえることができる。

上の解釈をPさんの自己像への反応に当てはめて考えてみることにする。

エピソード④「自分の写真も最近ですね、わかるっていうか、写真を携帯とかで、私が見てると、何？って感じで覗きに来て、Pちゃんだねとか言うと、指さしたり（省略）」

このエピソード以外にも自己鏡映像への反応ととれる、洗面所の鏡をじっと見るようになったとの報告があった。さらに、Pさんは日常的には鏡を使用していないが、家庭にて作業療法士が簡易的なマークテストを行ったところ、自己鏡映像を見てすぐにマークを取ったという。これらの出来事によって、新版K式発達検査の認知・適応領域の発達年齢とPさんのマークテストの通過とを直接的に関係づけることはできない。しかし、Pさんの自己像への反応には明らかに変化が生じている。まさに、「繰り返しの試行錯誤」によって気づくのではなくPさんの中に自分らしさの型＝パターンが想定されている。そのうえで写真の自己、鏡映像の自己に対して、自己の確定をしていると考えることはできないだろうか。



図1 パズルBOXに取り組む2歳児の例
(筆者が撮影：養育者に許可を得て掲載)

次に、ここで報告したPさんの5つのエピソードと新版K式発達検査の結果との関係をもとに、高等部入学後のPさんの行動における変化の意味を考える。5つのエピソードからは、Pさんの中で他者や対象に向かう認識に何らかの変化が生じたことが想定される。エピソード⑤のPさんの行動について、母は「初めのうちは何度も繰り返し振り返っていたのだが、いつしかふり返って確認をしなくても、そこにいることがわかって安心したようだ」と語った。筆者はこの語りから、Pさんの中の「不在の認識」に変化が起きたので

はないかと考えたのである。そのように考えるに至ったきっかけは、松本（2019）の以下の文章にある。少し長くなるが筆者の解釈を加えて引用する。

『“あるもの”を認識することと、“ないもの”を認識する能力はまったく別のものであり、不在（欠如）を認識するには、高度な象徴化の能力が必要だ。そこにあることに気づくことは、ヒト以外の生物にも可能である。しかし、あるべき物・人がなくなったこと、つまり不在を経験することは、「何かがなくなった」という体験を象徴化する能力によって可能になる（pp.51-53）』。

これは、目の前からなくなったものをその個体のありようを想定したうえで自身の中に立ち上げることができること。それができて初めて「なくなった」ことを経験、認識できるということだろうか。加藤（2011）の「表象」の説明を援用して考えると、Pさんは不在の対象を自身の体験として立ち上げることが可能になり、視覚や聴覚、あるいは触覚を駆使してその物・人に直接的に触れなくてもアクセスできるようになったといえるだろう。

「不在」である父が、「存在」という形でPさんの中に立ち上がり、その「存在」する父を意味する写真を取り出したのであろう。

5. まとめ

ここまでPさんの事例を通して、他者や対象に向かう行動変化の背景にどのような認知的な能力が関係しているのかを考えてきた。本稿では、これまであまり注目をされてこなかった自己鏡映像認知成立に影響する認知的な能力にも焦点をあてて考察を行った。

Pさんの他者へ向かう行動の変化は、周囲にある人や物の型＝パターンを自身の内部に想定できるようになったことによるものではないかと考えられた。そして、「型＝パターン」が形成されたことにより、不在は世界からの消滅を意味するものではないこと。無限の中間形からマルらしさを取り出すように、存在と不在との間の無限の形から目の前の不在を取り出すことだといえる。これは、「周囲の出来事の秩序を理解すること（村瀬，1981）」につながり、情緒的な安心を生じさせたと考える。

ここにあげたエピソードや解釈はほんの一端にすぎない。しかし、Pさんの事例を用いて認知的な発達に焦点を当てることにより、青年期にみられる行動としての変化を理解する新たな視点を提案できたといえる。今後、自己鏡映像認知の成立に必要とされる認知能力を手がかりにしながら、発達的な理解と具体的な支援とを結びつけるような提案を行っていきたい。

付記 研究にご協力いただき、掲載をご許可くださいましたPさんの保護者様に心より感謝申し上げます。また、本稿執筆にあたりご助言を賜りました作業療法士の松本郁代氏に深く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 赤木和重. (2003). 青年期自閉症者における自己鏡映像認知：健常幼児との比較を通して. *発達心理学研究*, 14, 149-160.
- 別府哲. (2001). *自閉症幼児の他者理解*. 京都：ナカニシヤ出版.
- 榎木田祥代・菊池哲平自閉症. (2010). ダウン症幼児における自己像の理解とその特性. *熊本大学教育学部紀要人文科学*, (59), 63-68.
- 加藤弘美. (2013). 鏡像認知成立過程における自己像への反応と他者像・対象像への反応との発達の関係. *人間発達学研究*, 4, 1-7.
- 加藤弘美. (2017). 乳幼児期における自己鏡映像理解—定型発達児と自閉症スペクトラム障がい児の比較から—. 愛知県立大学, 学位論文.
- 加藤弘美, 松本郁代 (2018). 自閉症スペクトラム障害児における感覚の特異性への理解と支援—特別支援学校在籍児の養育者へのインタビュー調査と事例検討を通して—. *生涯発達研究*, 11, 49-56.
- 加藤弘美. (2019). 重度知的障害児の言語コミュニケーション障害への指導—幼児と特別支援学校高等部における早期AAC手段導入の事例を通して—. *広島都市学園大学子ども教育学部紀要*, 6 (1), 3-15.
- 加藤義信. (2011). “有能な乳児”という神話—「小さなおとな」発見型研究から「謎としての子ども」研究へ. *子どもの心的世界のゆらぎと発達*. 木下孝司・加用文男・加藤義信編 (PP.1-33). 京都：ミネルヴァ書房.
- 菊池哲平. (2004). 自閉症における自己と他者, そして心：関係性, 自他の理解, および情動理解の関係性を探る. *九州大学心理学研究*, 5, 39-52.
- 村瀬学. (1981). *初期的心的現象の世界*. 東京. 大和書房.
- 松本卓也. (2019). 精神病理学/精神分析—世界体験を通して理解する自閉症—. 野尻英一・高瀬堅吉・松本卓也編. 〈自閉症学〉のすすめ. (PP.29-55) 京都：ミネルヴァ書房.